

プレス空知 新連載 「旅するピアニスト」 深井尚子 2019年11月

プレス空知の読者の皆様、私がプレス空知に連載を開始して、今度で6年目になります。前回の「楽しいピアノレッスン」が終了し、今月から、新しいタイトルでまた、皆様に紙面でお目にかかれますこと、とてもうれしく思います。新連載もどうぞよろしくお願いいたします。今回は、「旅」をテーマにお話します。

ピアニストは、演奏会でよく旅をします。現在は大学の授業もありますので、昔ほどではなくなりましたが、ピアニストとして活動している時は、あちこちに演奏しに行きました。旅といっても、演奏旅行の場合、その土地に着いても、すぐ練習を始め、リハーサル、本番となりますので、知らない土地を楽しむことはあまりできないことが多いのです。世界的に有名で人気の演奏家は、1年間に70回ほど世界中を駆け巡りますが、観光はほとんどしないのが実情です。とはいえ、「旅」には、いろいろな思い出があります。

もう20年も前になるかと思いますが、私は、ドイツモーゼル地方のワイン醸造会社社長と友人で、よくドイツのモーゼル地方に演奏で招待されました。モーゼル地方は、小さな町が点在していて、ドイツでも田舎といえるところです。その時は、モーゼル地方の最大の都市トリア（人口は10万人ほど）で、町をあげての音楽とワインのフェスティバルに呼ばれました。近隣の音楽学校の子どもの合唱や、音楽学校で学んでいる若い音楽家の卵が出演し、お披露目をする場でもありました。市長さんや教育関係の方もたくさんいらっしゃって、社交の場になっているような音楽会でした。私は、日本からのゲストとして、30分ほど演奏をすることになっていました。ワイン会社が共催しているため、モーゼルワインやドイツのスパークリングワイン、ゼクトがふんだんにふるまわれ、軽食もでるといって、素敵な演奏会でした。入場は無料で演奏会終了後は、皆さんが寄付をしていく、というシステムです。私は、田舎とはいえ、ドイツなので、日本からゲストを呼ぶくらいですから、当然、グランドピアノが設置されていると思っていました。しかし、私が日本を発つ1週間くらい前に、ドイツから連絡が来て、ピアノはアップライトしかないということがわかりました。わざわざ10000Kmもあるドイツまで、12時間かけて行って、アップライトで演奏をするというのは、少々、落胆しましたが、仕方ありません。できれば、グランドピアノにしてほしいと希望は言いましたが、私は、アップライトで弾く覚悟で、飛び立ちました（笑）。

そして、リハーサルの時、どこからか、グランドピアノが運び込まれてきました。それも、ベーゼンドルファーというウィーンの名器の小型版です。ワイン会社社長が、市長に掛け合い、グランドピアノを借りてくれたのでした。あの時のうれしさは忘れることができません。

その演奏会は、和気あいあいと楽しく終えることができ、演奏後のモーゼルワインもとても美味しくいただきました。その演奏を聴いた別のモーゼルワインのお店の方が、「次の日、是非、うちのレストランで弾いてほしい。弾いてくれたら、ワインもお料理も食べ飲み放題！友達も連れてきてっ！」といわれ、翌日、そのレストランで弾きました。そこは、当然、アップライトピアノでしたが、ウィーナワルツやドイツの民謡などを弾いて、とても盛り上がりました。日本では、あまり経験できない演奏会でした。ちなみに、今のドイツワインは、

甘くなく、お料理に合うような辛口のものがほとんどになっています。